

《資 料》

沖縄の民事陪審(2)

——記録から見た庶民の力——

齋 藤 哲 (訳)

(代表執筆者・陪審裁判を考える会)

(法廷は1964年7月7日午前10時40分に再開した。休廷を行った際に在廷していた者はすべて再び参集した。)

裁判長： 皆さん。以前にお話ししましたように、本件は刑事訴訟ではなく、民事訴訟です。そのため、原告側の責任は通常の刑事手続きとはやや異なります。刑事事件では合理的な疑いを超えて、罪を証明する責任が国にあります。これはとても重い証明責任です。しかし民事事件では、証拠の優越によって、その主張を証明する責任が原告にあります。

この裁判の終わりのほうで、証拠の優越という概念の要件を皆さんに明快に理解いただくために、定型の説示を受けることになるでしょう。先ほど述べたように、この事件の全体が審理されるわけではありません。私がこれから読み上げる記録には同意事項が記載されています。手続きの最後には、それを評議室に持ち込むことが認められることになるでしょう。この同意事項とは、両当事者と裁判所の同意を経たため、原告が証明する必要がない事実です。私たちは、争点を絞り込むために正式事実審理前準備手続きを持ちました。これによって私たち皆の時間は大幅に節約されることでしょう。

当事者から提起された同意事項は、裁判所によって承認され、この記録にまとめられました。それは以下のとおりです。

「原告と被告である極東建設サービス株式会社は、以下の事実が真実であ

ると、この書類によって同意するものである。

1. 原告のツルコ・N・ロバーズとドナルド・ロバーズは、それぞれ死亡したオーレン・K・ロバーズの法的な未亡人であり、法的な子であり、この訴訟の原告として適格である。

2. 1959年11月30日の午前1:45頃、沖縄コザ市の5号線において、オーレン・K・ロバーズは、被告チョウヘイ・トミシロの運転するピックアップトラックに衝突され、これにより死亡した。またこの車両は、チョウヘイ・トミシロの雇用主、被告の極東建設サービス株式会社所有のものである。

3. 当時、事故現場における法定速度は、時速25マイルであった。

4. 亡くなったオーレン・K・ロバーズは亡くなる数年前から、平均して毎月714.13ドルの給与所得があった。

5. 亡くなったとき、オーレン・K・ロバーズは38歳で健康であり、アメリカ保健教育福祉省のアメリカ人口統計局によって編纂・出版された保険数理生命表によると、平均余命は33年あった。

1964年7月6日

署名：原告代理人 チャールズ・P・ヘイグッド

被告代理人 ハワード・B・マクレラン、
極東建設サービス株式会社」

現在、チョウヘイ・トミシロ氏については、1962年11月29日に原告代理人ヘイグッドさんから、この件についての訴状が出されています。この訴状は、原告2名、すなわちツルコ・ロバーズさんとドナルド・ロバーズさんに代わって、チョウヘイ・トミシロ氏と極東建設サービス株式会社に対して出されたものであり、先ほど読み上げたように、被告トミシロ氏による車の運転の不注意が、ロバーズ氏の死を引き起こしたという事実と言及していました。損害の請求額が、子どもであるドナルド・ロバーズさん分が5万ドル、未亡人分として10万ドルです。マクレランさんが代理人を務める被告・極東建設サービス社は、期限内に、この訴状の申立てを

否認する文書を提出しました。召喚状はヘイグッド代理人の命令によって適正に送達されたものの、被告トミシロ氏は準備された召喚日には出廷しませんでした。

その後、原告代理人は、被告チョウヘイ・トミシロ氏に対して、欠席での判断を求め、裁判所は次のように命じました。これは、1963年1月21日に整理保存されました。

「原告代理人は、被告チョウヘイ・トミシロに対する法廷欠席について、欠席裁判の申立てを行った。

そして、被告チョウヘイ・トミシロは、必要な期限内にこの申立てに対する応答を提出しなかった。

先のチョウヘイ・トミシロが欠席したのは1963年1月18日であり、この日に欠席裁判の判決が認められた。

この判断は欠席裁判のみであり、損害賠償金を決定するものではない。このような損害賠償の額は、この場合には、裁判で原告によって証明されることが求められる。」

裁判所は、7月2日に、トミシロ氏に注意書を送付し、出廷を求められていた件について、欠席での判決が出されたことを知らせています。ちなみに本日の法廷の日時も知らせていますので、彼はこの裁判自体についても知っています。

結果的に、裁判所によって、以下のように決定されました。

「以下の正式事実審理前整理手続きが、アメリカ民政府裁判所の民事訴訟規則のルール16に従い、行われた。そこで以下のことが決定された。

1. 本件は、死にいたる人身傷害を引き起こしたとされる件についての損害賠償請求である。
2. 提出された申立ての争点は、原告の申立てと被告・極東建設サービス株式会社の回答である。被告チョウヘイ・トミシロは欠席したが、欠席裁判は1963年1月21日になされている。
3. この事件に係る裁判所の司法権は、大統領令10713のセクション10(b)(1)の範囲内で、改正に基づき、琉球諸島の高等弁務官によって決

定されたように、合衆国の財産と利益に関係する具体的な重要性の1つであるということで、行われる。

4. 事実に関する合意は、すでに提出されており、原告代理人と被告の極東建設サービス株式会社による合意に従う。」今ここで読み上げているのがこの合意です。

「5. 事実に関する以下の争点について、他のものを除いて、訴訟の中で引き続き争われる。

a. 被告の極東建設サービス株式会社に過失があったかどうか、またそれがあった場合、その過失は、死亡したロバーズの傷害と死に寄与したか、あるいは引き起こしたものであるかどうか。

b. 事故がロバーズの傷害と死を引き起こした時、被告トミシロは、同被告会社の従業員であったかどうか、そして、その雇用者の指示下にある、かつ従っている間における行為であったか。

c. この事故とロバーズの傷害と死の結果、死亡したロバーズの妻と子が被った損害額。

6. 以下の法律上の争点は、他のものを除いて、訴訟の中で引き続き争われる。

a. 被告トミシロの過失は、代位的に被告・極東建設サービス株式会社にその責任が帰せられるか？

7. ここで適用される実体法は、この訴訟の原因となる事故の日時に存在した琉球諸島の法となる。

8. ここで上記のように認められたことは、両者によって争われることが残った事実と法律が定められるため、明白な不公正を防止するために修正される場合を除き、この指示書が弁論を補足し、本訴訟の方向性を決めるものである。

沖繩・那覇において、1964年7月6日」

私がサインしています。形式と内容を承認して、原告代理人チャールズ・P・ヘイグッドと、被告代理人ハワード・B・マクレランがサインしています。

この法的争点というのは、この裁判所が扱うべき内容です。ここで、私たちが関心を持つべき事実に関して、先ほど読み上げた3つの事実の争点を、もう1度、読み上げます。

- a. 被告の極東建設サービス株式会社に過失があったかどうか、またそれがあった場合、その過失は、死亡したロバーズの傷害と死に寄与したか、あるいは引き起こしたものであるかどうか。
- b. 事故がロバーズの傷害と死を引き起こした時、被告トミシロは、同被告会社の従業員であったかどうか、そして、その雇用者の指示下であり、かつ従っている間における行為であったか。
- c. この事故とロバーズの傷害と死の結果、死亡したロバーズの妻と子が被った損害額。

みなさんが関わるのはこれら3つの事実に関する争点です。

これから、もし当事者がそうすることを選ぶなら、原告の代理人と被告である極東建設サービス株式会社の冒頭陳述が最初にあります。

その後、原告と被告は、規定に従って、証拠と証言、そして提示が希望されたなんらかの書証が提示されます。その後、法についての説示が陪審に与えられます。陪審は、その後に陪審室に入ることが出来、陪審長を選び、この事件の真実に関して決定することになります。

[注記：ハイグッド代理人は、マクレラン代理人同席のもと、裁判長とベンチ・カンファレンスで話し合い、この中の誰かがアメリカ外国保険組合の株を持っているかどうかを陪審員たちに質問することの許可を求めた。この要請は、このような質問が結果的に陪審員に、極東建設サービス株式会社が保険に入っていることを知らせることになるという理由で、裁判長によって却下された。]

ハイグッド代理人： 皆さん。私は、テーブルの端に座っている女性ツルコ・ロバーズと、今そこの床に座っている彼女の息子ドニーの、代理人としてここにいます。

ロバーズ夫人の夫、オーレン・キルビィ・ロバーズ氏は、1956年

12月3日に沖縄でロバーズ夫人と結婚し、3ヶ年弱ののち、彼は殺されました。実際、彼は結婚記念日の4日前に殺されたのです。この裁判の中で皆さんは、彼をキルビイという名で呼ぶのを聞くことになるでしょう。それが、彼の友人たちが彼を呼ぶときの呼び方だったのです。彼の名は、オーレン・キルビイ・ロバーズです。

証人たちは、オーレン・ロバーズ氏が仕事の途中で、早朝のおよそ1時45分に死ぬことになったと証言するでしょう。極東建設サービス社で働くチョウヘイ・トミシロ被告が運転する1台のピックアップトラックによってです。なお、極東建設サービス社はF E C O Nとして通常知られています。皆さんもF E C O Nという言葉がこの裁判中に繰り返し聞くかもしれません。シンプルにするために、彼らが電話に出るときの方法にならって、私も、被告・極東建設サービス社をF E C O Nとして呼びたいと思います。

ここで、事故の目撃証人によって証明されるように、キルビイ・ロバーズ氏は破裂した水道管の緊急補修のために仕事をしており、5号線の真真中に深い穴を掘る必要があったのです。それはちょうどシマブクに続く坂道で、アワセ・メドウ・ショッピングセンターから100ヤードほどのところでした。そこには30フィートほどの穴がありました。上には工事用の装置がありました。そこには警告灯とバリケードが設置されていました。私の目撃証人は、F E C O Nの所有するピックアップトラックが現れて、高速で移動して、警告灯やバリケードの警告を無視して、キルビイ・ロバーズ氏を撥ね、空中に飛ばして、穴の中に、彼を頭から落としたということ証言するでしょう。

ここにいる小さな少年、どこかに行ってしまいましたが、彼は自分の父親に会ったことがないのです。ロバーズ夫人といえ、3年弱しか夫と暮らせていないのです。お金でその喪失を補てんできる限り、そのピックアップトラックの運転手チョウヘイ・トミシロ氏の過失と、チョウヘイ・トミシロ氏が原告に対して大きな過ちを行ったという結論にみなさんが達するのに大きな問題があるとは思いません。

私たちはまた、彼を雇っていた会社にも瑕疵があり、彼らにも起こったことの責任があることを証明します。証人としてチョウヘイ・トミシロ氏自身を召喚し、彼に尋問します。彼を証言台に立たせ、彼に聞くつもりです。彼が過去に言ったように証言するならば、彼は事故の時、極東建設サービス社に雇われており、前夜はパーティで遅くまで、非常に遅くまで起きており、11月29日の朝8時に仕事に行くまで3～4時間しか寝ていませんでした。チョウヘイ・トミシロ氏は、寒い夜だったと証言するでしょう。11月の夜です。それは少し冷え込んだでしょう。彼は夜を徹して働かなければならない予定でしたので、家に帰ってジャケットを取ってきてよいか、働いている会社の従業員の1人に許可を求めました。そして、彼が許可を求めたその従業員は「いいよ、自分のピックアップトラックに乗って家に帰ってジャケットを取ってこいよ」と言いました。

事故の時、チョウヘイ・トミシロ氏は、家に戻る途中でした。彼は事故現場から1マイルほど離れたモロミに住んでおり、その方向に向かっていました。チョウヘイ・トミシロ氏は、暖かいジャケットを取りに家に帰る途中であり、そうすれば彼はその夜の残りを自分の雇用者のために働くことが出来るのでした。これは私たちの主張であり、皆さんに、チョウヘイ・トミシロ氏が雇用者の指示下であり、彼の雇用者の利益のために行っていたことを証明しなければなりません。彼は、自分が雇用者から雇われている仕事をより効果的にこなすために、ジャケットを取ってくるという許可を得て、自分の雇用者のピックアップトラックを運転していたのです。

私たちは、このピックアップトラックが割り当てられている会社の従業員も呼ぶ予定です。彼はチョウヘイ・トミシロ氏が皆さんに話すことを裏付けるでしょう。彼は、彼が自分のピックアップトラックに乗って、家に帰ってジャケットを取ってくるようにトミシロ氏に言ったことについても証言するでしょう。

これらの事実から私たちは、被告トミシロ氏が雇用者の指示下で行動しており、皆さんがきっと確信するであろう彼の過失は、その雇用者にもそ

の責任が帰せることができることを、皆さんは理解されるでしょう。

ここで、損害の問題に話を移そうと思います。これは人身傷害や死亡の民事訴訟では、いつもとても難しい問題です。なぜなら、皆さんは、キルビィ・ロバーズ氏の命はいくらぐらいの価値があるかというお金の観点で評価する努力をするために呼び出されることになるからです。苦痛といえ、私たちは彼が亡くなる前に、どれぐらいの痛みを受けたか分かりません。それについても考える必要があります。私は皆さんに、合意している事実の問題として、キルビィ・ロバーズ氏は中年であり、健康で、通常の平均余命は33年であったことを示すことができます。

私はまた、毎月いくら稼いでいたかを示し、彼が自分の妻と子を養うためにいくら払っていたかを示すことが出来ます。それが、彼らがどれぐらい損害を受けたかを組み立てる上での部分的な基準を皆さんに提供することになるでしょう。しかし、実際の現金の喪失に加えて、触れることの出来ないものの喪失についても考えるかもしれません。原告ドナルド・ロバーズさんから父親が奪われたという事実を考慮するかもしれません。彼は、父親と会うことはできないのです。

またあなたがたは、ロバーズ夫人が23歳の時に、愛しており、心のよりどころであった夫を奪われたという事実についても考慮することが出来ます。これらのことは金銭的な価値を持ちます。法律はそれらに価値があることを認めています。皆さんはどのようにこの価値に到達するのでしょうか。それは誤った基準で何かを測ろうとするようなものです。

私は皆さんに、眼鏡を通してこの事件を見せ、この事件が、そして眼鏡がどれくらい早く進むかという、時速という観点で測定します。これは、死の価値を測定するようなものです。しかし、皆さんはそれをしなければならなくなるでしょう。

注意して聞いて下さい。これは重要な裁判です。沖縄で最初の損害賠償請求の陪審裁判です。これは記念碑的裁判です。私たちは、アングロ・アメリカンの司法の原理に則って、これを行います。陪審の皆さんは、このピックアップトラック運転手の過失によって、ツルコ・ロバーズさんが

被った損害とドナルド・ロバーズさんが被った損害が、まさにどれくらいであるかを決定する立場にあります。また、私は皆さんに、ピックアップトラック運転手の雇用者は支払いの責任を負うべきかどうかを尋ねるでしょう。

ここで裁判長は、皆さんに証明要素について説示を行うでしょう。これは刑事裁判ではありません。皆さんは証拠について聞き、証拠を読み聞きするでしょう。原告は証拠の優越が得られるように本件を証明しなければならないと皆さんは聞きました。もし私が本件について十分確信がないのであれば、私はここにはいません。私は、皆さん、この裁判で以下のことについて皆さんを説得できます。それはチョウヘイ・トミシロ氏が、キルビィ・ロバーズ氏の死の原因であり、彼の行為は、原告の極東建設サービス社の従業員であったこと、彼は仕事の範囲中で行為を行っており、雇用者の利益のために行為を行っており、過失によりキルビィ・ロバーズ氏を殺害したことです。

マクレラン代理人： もしよろしければ、私の冒頭陳述は後にまわしていただけないでしょうか？

裁判長： 結構です。

ヘイグッド代理人： 裁判長。私は明日、証人を召喚しています。今日の手続きがもう少し長くなるのではないかと思っていたので、私の証人は明朝9時に召喚しました。今日私は、これ以上お話するものはありません。もし裁判所がよろしければ、明日の朝の9時まで休廷にしていただけませんか？

裁判長： 陪審の選定にどれくらいかかるのか、前もって私たちが知らないと言うことを、陪審も理解されるでしょう。ときにかかなりの時間を要します。幸運なことに、本件はきわめて短時間のものでした。

原告がこの期日に証人を呼んでいないと言うことですので、明日の朝まで休廷します。明日の朝9時まで、皆さんは自由ですので、ご自分の仕事をして下さって構いません。証人は9時に呼ばれていますので、私たちは、明日の朝9時半まで休廷します。

法廷の外でのあなたがたの行為について、先ほど読んでもらった警告を覚えておいて下さるよう、皆さんにお願いします。皆さんは、この件について、皆さん同士でも、他の誰かとも話すことできません。皆さんは、適正な時期が来るまで、沈黙を保たなければなりません。

(法廷は1964年7月7日午前11時08分に休廷した。)

(法廷は1964年7月8日午前9時18分に、沖縄県那覇市にて開廷した。)

出廷者： ラッセル・L・スティーブンス： 裁判長
ツルコ・N・ロバース： 原告
チャールズ・P・ハイグッド： 原告代理人
ツネヨシ・オオシロ： 原告代理人
ハワード・B・マクレラン： 被告・極東建設サービス株式会社代理人
ナガトシ・ヒガ： 通訳
ジェームス・L・スミス： 速記官
(陪審全員が出席)

裁判長： どうやら開廷時間についての混乱があったようです。9時か9時30分か、私の方で間違いがあったかもしれません。分からなくなったときのために、明日の朝は9時から開始することにしましょう。この裁判は、多くの日を要するとは思いません。9時に始めることで、私たちに朝早くに良いスタートが切れます。ですから、9時から開始にし、午後の再開は1時30分からにしましょう。

原告は、最初の証人を呼んで下さいますか？

異議がなければ、陪審員のために、もう一度争点について読み上げた方が良いと思います。

マクレラン代理人： 異議ありません。

ハイグッド代理人： 異議ありません、裁判長。裁判長、争点の確認の前に、

規則について思い起こすかどうかを決めていませんでしたが・・・。

裁判長： それは代理人の希望ですか？

ヘイグッド代理人： 私が望んでいるわけではありません。

マクレラン代理人： 被告はそれを望みません。

裁判長： 結構です。陪審が決めなければならない事実に関する争点があります。皆さんが決定するのは事実に関するこれらの争点に限られます。すなわち、これらの3つの争点以外については、皆さんが責任を負うことはありません。

a. 被告の極東建設サービス株式会社に過失があったかどうか、またそれがあった場合、その過失は、死亡したロバーズの傷害と死に寄与したか、あるいは引き起こしたものであるかどうか。

b. 事故がロバーズの傷害と死を引き起こした時、被告トミシロは、同被告会社の従業員であったかどうか、そして、その雇用者の指示下にあり、かつ従っている間における行為であったか。

c. この事故とロバーズの傷害と死の結果、死亡したロバーズの妻と子が被った損害額。

原告、最初の証人を呼んで下さい。

ヘイグッド代理人： 裁判長、準備が出来ました。ウィルソンさん、どうぞ。

琉球諸島の駐留技師によって雇われたジャック・H・ウィルソンが原告側証人として呼ばれた。宣誓ののち、以下のように証言した。

主尋問

ヘイグッド代理人からの質問：

Q： お名前をおっしゃって下さい。

A： ジャック・L・ウィルソンです。

Q： あなたは今どこに雇われていますか、ウィルソンさん？

A： 現在は金属クレーン部門の駐留技師のもとにいます。

Q： 1959年の11月30日、あなたはどこに雇われていましたか？

A： この島の水道部門で雇われていました。

Q： それはどこの管轄下にありますか？

A： 駐留技師の管轄下です。

Q： オーレン・ロバーズという名前の男性を知っていましたか？

A： はい。

Q： 彼のミドルネームは、キルビィ。そうですね？

A： はい。

Q： 彼の友達はそのことを何と呼んでいましたか？

A： みな彼をキルビィと呼んでいました。

Q： 1959年11月29日の夜と同月30日の早朝のこと、そして沖縄県シマブクの5号線、アワセ・メドウ・ショッピングセンターから300ヤードほど東のところを思い出して下さい。その時間と場所で、なにか普段と変わったことは起きましたか？

A： はい。

Q： 何が起きましたか？

A： 1台の車がロバーズさんを轢き、彼を殺しました。

裁判長： すみません、ウィルソンさん。皆に聞こえるようにもう少しはっきり、もう少し大きな声で発言していただけますか？

証人： 車がロバーズさんを撥ね、彼を殺しました。

ヘイグッド代理人： そのとき、あなたはいましたか？

A： いました。

Q： あなたは車がロバーズさんを撥ねるのを見ましたか？

A： はい。

Q： それはどんな種類の車でしたか？

A： ピックアップトラックでした。どの会社なのかを特定することは、私には出来ません。

Q： それは古いタイプでしたか？ それとも新しいタイプ？

A： いえ、とても新しい物ではありませんでした。おそらく2年くらい経っ

ています。

- Q : そこで、その時、何が起こりましたか？ あなたがそこにいた理由は何で、ロバーズさんがそこにいた理由は何ですか？
- A : この道路の真下にあるアワセ地域の水道管が壊れていたのです。私たちは補修するために掘り起こしていました。
- Q : ロバーズさんもこの仕事に加わっていたのですね？
- A : はい。
- Q : その掘削場所はどこでしたか？
- A : 東に向かう、この道路の右側でした。
- Q : この道路の舗装を掘削していたのですか？
- A : はい。
- Q : 事故の時、掘削はどれくらいの深さでしたか？
- A : およそ20フィートでした。
- Q : その車両がロバーズさんを撥ねる前に、あなたはその車両を見ましたか？
- A : はい、見ました。
- Q : どちらの方向からそれは来ましたか？
- A : それは西から来ました。
- Q : それは、マチナトからですね？
- A : はい。
- Q : その車両は坂を上っていた？
- A : はい。
- Q : それはどれくらいの速さで走っていたかについて、何らかの形でいうことはできますか？
- A : それはかなりの速さで走っていました。時速40マイルから50マイルの間だと思います。
- Q : その時、その道路における法定速度がどうだったかご存知ですか？
- A : 時速25マイルです。
- Q : あなたがその車両を見た時、それは、道路の中心線から見て、道路の右側を走っていましたか？ それとも左側を走っていましたか？

A： 右側でした。

Q： 30日の早朝およそ1時30分あるいは1時45分に、それが起こったとおっしゃいましたね？

A： はい。

Q： この場所の周りに、なんらかの警告サイン、ライトのようなものは立っていましたか？

A： ありました。

Q： どのようなものか説明していただけますか？

A： 私たちが作業している場所から西に100ヤードほどのところにバリケードが設置されていました。バリケードを東に向かう右側の2車線にわたって設置していました。またそこには2つのライトを置いてありました。そこには2つのライトがあったのです。残りの2つのライトは反対側に置いてあり、最初のバリケードを置いたところに2つの警告灯を設置しました。そして私たちは、もう1つのバリケードを、器具を置いたところ、私たちが掘削している東側に設置し、そして左側の車線を斜めに交差するようにバリケードを置きました。彼は左の内側の車線にきたとき、右側の車線に曲がってきたのです。

Q： どんな種類の器具が、事故の現場にはありましたか？

A： パイプ=ホーラー（発音に基づく記録）。

Q： それがどんなものか説明していただけますか？

A： それは、掘るためのパワーショベルのようなものです。溝を作るのに使われます。

Q： 機械に向けてほり、機械の後ろから出すパワーショベルですね？

A： （「はい」と合図）

Q： これはどれくらいの大きさですか？ 機械全体として、おおよそどれくらいの高さ、幅、長さですか？

A： それらはおおよそ6から8フィートの幅で、おおよそ10フィートの高さ、長さです。ショベルを伸ばすとおおよそ20～25フィートになります。

- Q： この装置は、トラックに取り付けられているのですか？ あるいは自走式ですか？
- A： 自走式です。
- Q： ほかの装置はそこにありましたか？
- A： はい。クラムシェルがありました。新しいクレーンです。
- Q： クレーン？
- A： はい。貝殻のような形をした掘削機の。
- Q： それにクレーンがついている？
- A： 移動可能でした。
- Q： トラックに設置されている？
- A： そうです。
- Q： その場を照らすような照明器具はありましたか？
- A： はい。携帯発電機、それとよく分かりませんが、2つのライトだと思えます、それぞれ500ワットずつでした。
- Q： ウィルソンさん、あなたの言葉で、キルビィ・ロバーズが、彼が撥ねられた時、何をしていたかを説明してくださいますか？
- A： そうですね。彼はクラムシェルを掘削のために再び持ち出そうとしていました。私たちはそれを後に動かしていました。それはそのパイプを探っているところにおいてあり、彼は再び持ち出すために潜っており、その機械が後に動くのに合わせて、壁沿いに右側を歩いていました。
- Q： 彼は、クラムシェル・クレーンの近くを歩いていた？
- A： (「はい」と合図)
- Q： 彼は道路のセンターラインと、彼が誘導しているクレーンの間にいたのですか？
- A： はい。
- Q： 彼は、そのクレーンに彼自身が乗っているわけではなかった？
- A： そうではありませんでした。
- Q： そのクレーンを運転していたのは誰ですか？
- A： ある沖縄人の操縦者です。

- Q： 彼は、進行方向の沖縄人の操縦者の方に向かって歩道を歩いていた。そうですね？
- A： その通りです。
- Q： 事故の時、掘削場所からロバーズさんはおよそどれくらい離れていましたか？
- A： だいたい35フィートか40フィートだと思います。
- Q： 事故が起こったとき、あなたは、ロバーズさんのどちら側にいましたか？
- A： 私は、掘削場所の反対側に立っていました。
- Q： では、あなたは、掘削場所の東側にいたのですか？
- A： はい。
- Q： そして、ロバーズさんは掘削場所からおよそ35フィート西側にいたのですか？
- A： そのとおりです。
- Q： どのように衝突が起こったのか説明してください。
- A： えーと、それは何か警告を発する時間もないくらいとても早くおこりました。全力で私は彼に叫びましたが、しかし彼が私の声を聴く前に、車が彼にあたっていました。
- Q： あなたは車があたるのを見たのですか？
- A： はい。
- Q： 車があたって、ロバーズさんはどうなりましたか？
- A： 彼は15から20フィート空を飛んで、地面を転がり、掘削している穴の中に落ちました。
- Q： 掘削している中に落ちた？
- A： (「はい」と合図)
- Q： 彼を撥ねた車両はどこにいきましたか？
- A： 彼の上に乗上げていきました。
- Q： どれくらいの時間がかかりましたか？ いや、答えなくてもいいです。その車両がロバーズさんを撥ねて、彼の上に乗上げた後、何が起こりましたか？

- A : えーと。そのときはそれが誰だか正確にはわかりませんでした。私は、見えればと思って反対側に駆けていき、歩道に彼の帽子が落ちているのが見えたのです。
- Q : ロバーズさんを掘削場所から引き出すために何か試してみましたか？
- A : 私たちは、全力でクレーンのクラムシェルからケーブルを外しました。そのうち犯罪捜査部門の人たちが到着して、彼らが病院と連絡をとり、その車両をそこから持ち上げました。捜査部門の人たちは、救急車と一緒にいました。
- Q : ロバーズさんは、あなたがたが車両を持ち上げた時、まだ穴の中にいましたか。
- A : はい。車両を最初に出すこと以外に、彼を引き出す方法はありませんでした。彼の上に車両がありましたから。
- Q : 穴の中から救助されるまで、ロバーズさんはどれくらいの時間、穴の中にいましたか？
- A : 30分以上ではなかったと思います。
- Q : あなたは、彼が穴から助け出されるのを見ましたか？
- A : はい。
- Q : 彼が活着ているか、呼吸しているかどうかあなたには分かりましたか？
- A : えーと。正直に言うと、それほど長く彼を見ていませんでした。
- Q : あなたはロバーズさんをとともよく知っていますか？
- A : はい。知っています。
- Q : 最初に出会ったのはいつですか？
- A : 1947年の10月です。
- Q : どこですか？
- A : カリフォルニアのエル・セレド（発音に基づく記録）です。私たちは、沖縄に行く準備をしていました。
- Q : 以来ずっとあなたは彼と知り合いだったのですか？
- A : はい。
- Q : あなたは彼と同時に沖縄に来たのですか？

A： はい。同じ飛行機で来ました。

Q： 彼がここ沖縄でなくなる前に、個人的に彼を知っていましたか？

A： はい。

Q： どこに住んでいたか知っていますか？

A： はい。

Q： どこですか？

A： 彼はサダ居住区に住んでいました。

Q： それは政府の居住区の1つですか？

A： 政府の居住区。そうです。

Q： 彼は政府による家具付き住宅に住んでいた。そうですね？

A： はい。

Q： 彼の未亡人を知っていますか？

A： 会ったことはありますが、よくは知りません。

Q： 彼女はこの法廷に今いますか？

A： はい。

Q： もし彼女が見えれば、指さしていただけますか？

A： (証人は原告を指さした。)

Q： 彼らがサダ居住区で住んでいた家は、どれくらいの大きさでしたか？

A： 寝室が2つありました。

ヘイグッド代理人： 質問は以上です。

マクレラン代理人： 質問はありません。

裁判長： ありがとうございます。ウィルソンさん。

(証人は任を解かれ、退席した。)

マクレラン代理人： 裁判長のお許しがあれば、いくつかの法的問題について、次の証人が証言する前に、陪審なしで話すべき事があると思います。

裁判長： 結構です。陪審は、改めて呼び出しがかかるまで、任を解きます。

ヒガさん、上訴法廷として知られている評議室まで陪審に付き添っていただけですか？ そして、戻ってくる際については、陪審を連れ戻ってくださって大丈夫なときに私たちが連絡します。

(廷吏がそれに応じ、陪審は1964年7月8日午前9:41に退席した。)

マクレラン代理人： 裁判長、原告によって召喚された証人トミシロさんは、この事件の一方の当事者です。彼は原告から証人として召喚されています。ここで、陪審のいる場でこのことを聞かなかった理由は、この証人の尋問についてのグランドルールを決めるためです。第1に、彼は原告の証人ですか？ 彼は、相手側当事者ですか？ 彼は、証人として彼を召喚した側の当事者から反対尋問を受けるのでしょうか？ 私たちは知っておく必要があります。そうでなければ、おそらくかなりたくさん異議を出すことになるでしょう。

代理人はすでに、相手側当事者として証人を呼ぶ意図について明らかにしています。それは私にしてみれば、反対尋問の過程を使おうと意図しているのだと思います。私たちは、前もって、これが許容される、あるいは許容されない範囲があるのかどうか、知る必要があります。私の意見としては、この事件の争点は絞られているので、この証人の反対尋問は、損害賠償の問題に限ることができます。これが、この証人が相手方である理由のすべてであり、同時に、原告の主張点であるからです。この証人個人に関するようなこの証人のその他の争点は、欠席裁判によって決着がついています。

もしこの証人に対して、相手方からのすべての反対尋問が許容されるのであれば、それは被告である極東建設サービス社に予断を持たせることになり、彼は相手方当事者ではないという理由で、私はそれに異議を申し立てます。この問題はすでに終わっており、残っているのは、損害額の問題だけなのです。

ここで、原告側代理人にとって困難を強いるものであることは理解していますが、私たちは、損害賠償額以外のあらゆる質問に対するこの証人の回答について、原告を制約する資格があると考えています。

裁判長： いかがですか、ハイグッドさん？

ハイグッド代理人： 被告のトミシロ氏は限られた意味でしか当事者ではない

というのは真実です。彼に対しては欠席裁判が行われています。しかし、彼は当事者であり、原告に対して敵性があると確かに想定できます。私たちは、彼からとF E C O Nから、相当額を勝ち取ろうと試んでいます。私は、この男性を面接し、この事件の事実に関して彼がこれまで述べたことを知っています。しかし、彼が私たちの利益に対して敵性であると想定されるという事実によって、私が彼を証言台に立たせたときに、言うであろう事を知る方法がありません。このことは、原告の利益に敵対すると想定される証人の証言によって制約を受けるということで、原告は極端に不利な立場になります。

私は、マクレランさんの推論を高く評価できますし、トミシロ氏が損害賠償額の問題に限り相手側当事者であり、彼に対するその他の争点はすでに終わっているというのは非常に合理的な主張だと認めます。これは該当するかも知れませんが、しないかも知れません。私は、まだこの当事者に対して過失があったことを証明しなければなりません。欠席裁判の効果は、単に彼自身のために証拠を示すことが出来なくなったに過ぎません。

しかし、この証人を前もって敵性証人として指名することを裁判所に要望したいと考えています。また、彼が相手側当事者の1人であるという理論に基づくのではなく、彼は、敵性証人であると想定されるという理論に基づき、私たちによる反対尋問の機会を与え、彼が行うかもしれない陳述によって私たちが制約を受ける必要がないことを裁判所に要求したいと思えます。

裁判長： 当然、判決が極東建設サービス社に対しても科されることを検討するため、そして万が一、両当事者の罪科を見つけた場合、その判決の性質を検討するために、もしこの証人にそれが可能なのであれば、それをこの証人に求めることは相応しいことでしょう。

マクレラン代理人： さらにもう1つ話させてください。この証人が敵性を示すことが万が一あった場合には通常の決定がなされうると、私の主張として提案するつもりはありません。

裁判長： はい。分かりました。

マクレラン代理人： 私は、裁判所がこの裁量を許される前に、それがまず証明されなければならないと信じています。

裁判長： その点に同意する意思があります。証人を証言台に立てる前に、確認させて下さい。10時15分まで休廷しましょう。ヒガさん、陪審に伝える際に、10時15分に戻ってきてほしいと伝えて下さい。そうすれば、コーヒーか何かを飲みたい場合には自由に動けるでしょう。

(法廷は1964年7月8日午前9時49分に休憩に入った。)

(法廷は1964年7月8日午前10時15分に再開した。休廷前にいたすべての人が再び出廷した。陪審はまだいなかった。)

裁判長： 原告代理人からの要望について、以下のように決定します。当事者であるトミシロ氏が召喚された場合、彼は、原告側の証人として扱われず。原告は、彼の陳述によって制約され、損害賠償額の問題についてを除き、反対尋問を行うことは許容されません。

しかし、もしそれによって実際のところ敵性が示されるように展開した場合、当然、反対尋問を行うことが出来ます。

ヘイグッド代理人： 結構です、裁判長。

裁判長： 陪審を呼んでいただけますか、ヒガさん？

ヘイグッド代理人： この証人に対する主質問をオオシロさんに担当させたいと思います。

裁判長： よろしい。法廷通訳を通じて進めましょう。

ヘイグッド代理人： 彼は英語で質問します。オオシロさんは、何が起こったかについて、より詳しく知っています。

裁判長： はい。

(陪審が法廷に1964年7月8日午前10時17分に再入場した。)

裁判長： トミシロ証人を召喚して下さい。

チョウヘイ・トミシロ（沖縄県コザ市字モロミザト175居住）は、原告により証人として召喚され、以下の通り通訳者を介して宣誓し、証言した。

主尋問

オオシロ代理人による質問：

Q： トミシロさん、あなたの名前は何といいますか？

A： チョウヘイ・トミシロです。

Q： あなたの住所はどこですか？

A： コザ市字モロミザト175番地です。

Q： あなたはこの事件の被告ですか？

A： はい。

Q： あなたは被告である極東建設サービス社を知っていますか？

A： はい。

Q： どのような事情で知っていますか？

A： 私はその会社の従業員だったからです。

Q： いつからF E C O Nに勤務していたのですか？

A： いつからその会社に勤務していたのか分かりません。しかし、事故を起こした後にその会社での勤務をやめました。

Q： 「事故」とは何を指しますか？

A： 私は他の人を轢き殺しました。

Q： あなたは原告の夫のロバーズさんのことを言っているのですか？ それはあなたが死に至らしめた人ですか？

A： はい。

Q： あなたはどのくらいの間F E C O Nで働いていましたか？

A： 3年間です。

Q： あなたの任命された職は何ですか？ あなたの仕事は何でしたか？

A： 私は修理工の作業長でした。

Q： 何の修理ですか、自動車修理または重装備品修理ですか？

A： 重装備品修理の作業長でした。

オオシロ代理人：

Q： 1959年11月30日1時45分に、またはその時間の頃に、何が起こったか覚えていますか？

A： はい。

Q： その時、あなたは自動車の運転免許を持っていましたか？

A： はい、私は自動車免許を持っていました。しかし、自動車免許はその前日に失効しました。

Q： その日の前に、1959年11月30日の前に、あなたはFECONで何をしていましたか？

A： その時、私たちの会社は那覇空港基地に作業場を持っていました。私は機械と重装備品の修理を監督していました。同時に、私は機械と重装備品の修理に従事していました。

Q： この事故の時、どのような種類の自動車をあなたは運転していましたか？

A： シボレーのピックアップトラックです。

Q： その時、その乗り物は誰のものでしたか？

A： 会社のものでした。

Q： その乗り物はFECONの特定の部署または人のものでしたか？

A： はい。

Q： それは誰のものだったかを述べて下さい。

A： シュウコウ・ヒガさんのものでした。

Q： シュウコウさんはFECONの従業員だったのですか？

A： はい。

Q： 彼の役職は何でしたか？

A： 支配人です。

裁判長： あなたは、彼が極東建設サービス社の支配人だったというのですか？

A： はい。

オオシロ代理人：

Q： 1959年11月30日の前日、1959年11月29日に、あなたは何時に仕事を始めましたか？

A： 午前8時からです。

Q： 何日の何時まであなたは仕事を続けるはずでしたか？

A： 翌朝までです。

オオシロ代理人：

Q： 言い換えれば、あなたは29日午前8時に仕事を始めて、翌朝午前8時まで仕事を続けることになっていたということで、よろしいですか？

A： はい。

Q： その乗り物をどのようにして利用したのですか？ 言い換えれば、どのようにしてあなたはその乗り物を運転することを許されたのですか？

A： ピックアップトラックが私たちの機械部門に割り当てられていました。しかし、そのピックアップトラックはドアガラスがありませんでした。寒い日だったので、私はヒガさんに割り当てられた、その乗り物を借りたのです。

Q： あなたはシュウコウ・ヒガさんに、そのトラックを使うために近づいたのですか、それともシュウコウ・ヒガさんが自発的に、あなたにそのトラックを用いる許可を与えたのですか？

マクレラン代理人： 私たちはその質問に異議を唱えます。それは不適切な主尋問です。結論を求めています。また、他者の内心に関するものです。

裁判長： 分かりました、その異議を認めます。

オオシロ代理人：

Q： どのような目的であなたはその乗り物を運転したのですか？

A： その夜は寒かったので、帰宅してジャケットを取りに行きたかったのです。

Q： あなたはジャケットを取りに行った後に何を計画していましたか？ 仕事に再び戻るつもりだったのですか？

A： はい。

Q： あなたは先ほど、この事故の直後にF E C O Nを退職したと述べました。あなたはこの事故で裁判にかけられたことがありますか？

A： はい。

マクレラン代理人： すみません、オオシロ代理人。この時点で、その証人が琉球人であることにかんがみて、私が思うにヒガさんは、あなたは彼に、ここで証人として召喚されることを告げるべきです。また、彼が裁判所から受けた通知を思い出させるべきです。すなわち、彼の欠席判決が確定したことと、彼に関する限り、この陪審が彼の欠席判決の損害賠償額も査定するであろうことについてです。(通訳者が従った。)

裁判長： 彼はまた、その損害賠償額に関するいかなることについても、希望すれば弁護士を付して出廷する権利があることを銘記されるべきです。彼はそのことを理解していますか？

証人： はい。

オオシロ代理人：

Q： どの裁判所で、あなたは審理されましたか？

A： 私はコザ巡回裁判所で審理されました。

Q： あなたは有罪判決を受けましたか？

A： はい。

Q： どのようにして、あなたがそのトラックを得たかに戻りましょう。ヒガさんがこのトラックを用いる許可をあなたに与えたのですか？

A： どの乗り物についてあなたは話しているのですか？

Q： この事故をもたらした乗り物です。

A： 彼は私の乗り物にかえて、彼の車を用いるよう言いました。

オオシロ代理人： 尋問は以上です。

裁判長： 反対尋問を行いますか？

反対尋問

マクレラン代理人による質問：

Q： トミシロさん、あなたは極東建設サービス社に1957年度には、勤務していたのですよね？

A： 私は正確な日時は分かりません。私はその年に勤務していました。

Q： その会社に勤務していたとき、あなたを雇用していたのは誰でしたか？

A : ヒガさんが初めて私を雇用しました。

Q : ヒガさんはあなたの友人ですか？

A : その時、彼は私の友人ではありませんでした。しかし、彼は雇用後に私の友人になりました。

Q : あなたがた2人はその時以来、良い友人だったのですよね？

A : はい、私たちは同じ会社の従業員でしたから。

Q : あなたがF E C O Nに勤務した時、あなたは重装備修理工として雇用されていましたか？

A : はい、私が最初に雇用されたときは。

Q : その後、あなたは重装備の作業長になったのですか？

A : はい。

マクレラン代理人 :

Q : いつ、あなたは重装備の作業長になったのですか？

A : 私がF E C O Nに勤めて、およそ1年後です。

Q : どの会社重役があなたを作業長に昇任させたのですか？

A : 会社重役ですか。

Q : その重役の名前は何ですか？

A : ヒガさんが私を作業長に推薦し、会社社長が私を作業長として任用しました。

Q : その時の会社社長は誰でしたか？

A : トミーさんです。

Q : トーマス・スチュワートのことですか？

A : はい。

Q : 彼は、今は亡くなっていますよね？

A : はい。

Q : あなたが重装備修理工および作業長として働いていたとき、あなたの作業場は装備場または会社の車両基地でしたか？

A : はい。

Q : それはあなたが働いていた場所でしたか？

A： はい。私は大部分の仕事を車両基地でしていました。しかし、私たちの装備はあちこちに配送されるので、多くの場所へ行かなければなりませんでした。

Q： さて、あなたは1958年2月12日に失効した運転免許を持っていたのですよね？

A： はい。私は運転免許が以前に失効したことを知っていたので、乗り物を運転しませんでした。

Q： それでは、装備の仕事で様々な場所へ赴くとき、誰か他の人があなたを車で連れて行ったということで、正しいですか？

A： はい。

Q： あなたが会社の車を公道で運転した時は、この事故が起こった夜だったということで、正しいですか？

A： 私は車両基地の中で乗り物を運転していましたが、車両基地の外で運転した初めての時が、この事故の夜でした。

マクレラン代理人：

Q： あなたにとって乗り物を運転して、車両基地から仕事を行っている場所へ行くことは必要ではなかったということで、正しいですか？

A： 私たちが仕事場へ行くときはいつでも、2、3人が私に同行しており、修理工のほとんどは運転免許を持っていますので、彼らが乗り物を運転しました。

Q： あなたは公道で乗り物を運転することに非常に注意を払っていたということで、正しいですか？

A： はい。

Q： あなたが運転免許を持っていないことを分かっていたからということで、正しいですか？

A： はい。

Q： 会社はその乗り物を運転する人に運転免許証の番号と失効日を本部のリストに載せる方針だったのですか？

ヘイグッド代理人： 私はこの質問方針に異議を唱えます、裁判長。私はそれ

がこの証人の信用性にいかなる関わりを持つのか分かりません。それは主尋問の範囲を著しく超えています。彼は主尋問の範囲を逸脱し、その証人の信用性にいかなる関わりのあるいかなるものも尋ねていません。その質問は不適切な反対尋問です。

マクレラン代理人： 裁判長、彼が運転免許を持っていたのであれば、弁護士により尋ねられた主尋問のドアは開かれています。私は運転免許に関する会社の方針に踏み込む権利を持っており、持っていると思います。

裁判長： 異議は認めません。続けなさい。

証人： 会社は運転者の氏名のリストを持っていましたが、運転免許の失効日のリストを持っていたかどうか分かりません。

マクレラン代理人：

Q： あなたの氏名と運転免許番号はそのリストに載っていたのですか？

A： 私の運転免許番号は載っていませんでした。しかし、私の氏名は本に載っていました。

Q： あなたは会社の副社長であるジョージ・ホールさんと、あなたの運転免許または運転免許の失効に関して、話をしたことがありましたか？

A： いいえ。

Q： ホールさんがあなたにあなたの運転免許について質問し、あなたになぜあなたが有効な運転免許を持っていないのか、尋ねたことはありましたか？

ヘイグッド代理人： その質問に異議を唱えます。彼はすでにそれに答えています。

裁判長： 彼はその後半部に答えていません。彼はその一部に答えました。それを繰り返していただけますか。

マクレラン代理人： 分かりました。

マクレラン代理人： いかなる機会にホールさんと会話をしましたか、彼があなたに、なぜあなたが有効な運転免許を持っていないのかを尋ねたとき？

ヘイグッド代理人： その質問に異議を唱えます。それは、裁判所の外で行われた会話とされている伝え聞きの答を求めるものです。どの原告もいませ

んでした。完全に伝え聞きです。

マクレラン代理人： 質問を撤回します、裁判長。

ヘイグッド代理人： 裁判長におかれましては、陪審に対し、その質問を無視し、その質問に関して聞いたかもしれないあらゆることを無視するよう、指示することを求めます。

裁判長： よろしい、陪審はその質問と理解したかもしれない回答のあらゆる部分について指示を受けるものとします。

マクレラン代理人：

Q： トミシロさん、あなたは会社の乗り物を公道で車両基地と仕事場の間で一度も運転しなかったと私たちに述べました。それでは会社の車を公道で運転することはあなたの仕事で必要ではなかったということは正しいですか？

A： 私の仕事との関わりでということですか。

Q： その通り。

通訳者： 彼は私の翻訳を把握していませんでした。もう一度翻訳してよいですか？

マクレラン代理人： 質問を言い換えさせて下さい。

マクレラン代理人： トミシロさん、あなたはFECONで3年間修理工または作業長として働き、その3年間一度も、車両基地と作業場所の間で働いている間に会社の乗り物を運転しなかった、それは正しいですね？

A： その通りです。

Q： あなたは運転手として雇用されたのではないですね？

A： いいえ。

Q： そしてあなたは1年9ヶ月間運転免許を持っていなかった——撤回します。あなたが運転免許を持っていなかったのは、1958年2月12日から1959年11月30日の事故の時までの1年9ヶ月だった、それは正しいですか。

A： はい。

Q： ヒガさんはあなたが運転免許を持っていなかったことを知っていました

か？

ヘイグッド代理人： 異議あり。結論を求めています。

マクレラン代理人： 質問を撤回します。

マクレラン代理人： あなたはいつかヒガさんに、有効な運転免許を持っていないと伝えましたか？

A： いいえ。

Q： あなたは彼とあなたの運転免許について話をしたことはありましたか？

A： いいえ。

Q： あなたはF E C O Nで働いていた間に、運転免許を持っていない事実を、誰かから隠そうとしましたか？

A： いいえ。

Q： あなたは誰か、F E C O Nのあなたの上司に、あなたが運転免許を持っていないことを知らせましたか？

A： いいえ。

Q： それでは、問題の夜、事故が起こった夜、あなたがマチナトの車両基地を出発した時に、誰が車両基地にいましたか？

A： その夜ですか？

マクレラン代理人：

Q： あなたが車両基地を出発した時、そこに誰がいましたか？

A： その時、守衛と私がそこにいました。

Q： その守衛の氏名がわかりますか？

A： いいえ。

Q： ヒガさんはそこにいましたか？

A： いいえ、彼は家にいました。

Q： どのようにして、そのことが分かるのですか？

A： 彼が私たちから去るときに、彼は家にいるだろうと私に言いました。

Q： それはいつ、何時ですか？

A： 正確な時間は分かりません。

Q： 真夜中の前ですか？

A： 真夜中の前です。

Q： 29日の暗くなってから、しかし真夜中の前ですか？

A： はい。

Q： それでは、29日夜にあなたが最後にヒガさんを見たのはどこですか？

A： 私は彼がヒガさんの家に向かう道路で見ました。

Q： 分かりました、その時にあなたは何をしていましたか？

A： 私の運転手と私が私たちのピックアップトラックに乗っていたときに、
私たちは彼とそこで会いました。

Q： あなたはどこにいたのですか？

A： 私たちは那覇、私たちの仕事場から帰って来ました。

Q： これは那覇航空基地ですか？

A： はい。

Q： ジョージ・クラウドさんを知っていますか？

A： はい。

Q： クラウドさんは1959年11月29日夜に、那覇航空基地でのそのプロジェクトの任についていましたか？

A： 分かりません。私は彼をその夜に見ていませんが、その日の昼間に見ました。

Q： それではあなたは那覇航空基地の仕事場に29日夜にいたと言うのですか？

A： はい。

マクレラン代理人：

Q： あなたが那覇航空基地の仕事場を去ったのは夜の何時でしたか？

A： 正確な時間は分かりません。

Q： ピックアップであなたの家の方向へあなたが出発した何時間前だったか、見積もっていただけますか？

ハイグッド代理人： 少しお待ち下さい。この質問の方向に対して主尋問の範囲をはるかに遠く離れていることを理由に異議を申し立てます。それは証人の信用性と何ら関係ありません。それは重要でなく無関係です。

裁判長： 主尋問は、もちろん、この証人の家への外出を取り巻く事情に関するものでした。この証人はすでにヒガさんがF E C O Nの支配人だったことを証言しました、そして彼の証言からもちろんF E C O Nとヒガさんをつなぐものです。彼はまた車両基地の自動車と彼の仕事の取扱いに関して証言してきました。私は、これはその調査分野での論理的な追及とと思います。異議は却下します。

マクレラン代理人： ヒガさん、質問してもらえますか？（通訳は言うとおりにした。）

証人： 正確に思い出せません。

マクレラン代理人： トミシロさん、あなたがヒガさんを見たのは、那覇航空基地からマチナトの車両基地に戻ってきた後でしたか、または那覇航空基地から車両基地までの間の道路上でしたか？

A： 私はヒガさんとマチナトへの道路上で会いました。

Q： どのように、ヒガさんに配属していた彼のピックアップトラックが、その夜に車両基地に入ったのですか？

A： そのピックアップトラックが車両基地にあったという意味ですか？

Q： あなたはヒガさん配属のピックアップトラックを用いたと私たちに述べませんでしたか？ 車両基地からモロミへ向かったそのトラックのことで。私が知りたいのは、どのようにしてそのトラックが、あなたがヒガさんを見たところから、車両基地へたどり着いたかについてです。

A： 私たちがヒガさんをマチナトへの途中で見たとき、私たちはピックアップトラックを換えて、そのピックアップトラックを私たちの車両基地へ持っていったのです。しかし、その後、私たちはトレーラーを運転して、那覇にある私たちの仕事場へ行きました。

マクレラン代理人： あなたがヒガさんとピックアップを交換したとき、あなたと一緒にいた運転手が運転していましたか？

A： はい。

Q： あなたはヒガさんに、彼のピックアップトラックをあなた自身の目的のために用いるつもりだと伝えましたか？

A： いいえ。私はそれを会社の仕事の目的のために用いるだろうと伝えました。

裁判長： マクレランさん、その答はあなたの意図しているものに応答していると思われませんか。

マクレラン代理人： そのとおり。私は別の質問を彼にするつもりです。

マクレラン代理人： あなたはヒガさんに、このピックアップトラックを用いてあなたの家にジャケットをその夜に取りに行くつもりだと伝えましたか？

A： いいえ。

Q： その夜、あなたがその目的でその乗り物を用いるつもりだと、あなたは誰かに伝えましたか？

A： いいえ。

Q： あなたはその夜に、その乗り物をその目的で用いる誰かの許可を求めましたか？

A： いいえ。

Q： それでは、ジャケットを取りに行くためにトラックを取得して使用することは、あなた自身の考えであなた自身の使用のためだったということで、正しいですか？

A： 寒かったので、会社で働くために、私はそれを取りに行きました。

裁判長： もう一度質問しましょう。それでは応答していない。ヒガさん、他の質問ではなく、尋ねられた質問に応答して回答するよう、証人に指示してください。

証人： ジャケットなしでは私は仕事を続けることができませんでした。それゆえ、私はジャケットを取りに行きました。

裁判長： もう一度試みますか、マクレランさん。

マクレラン代理人： ヒガさん、質問をもう一度してもらえますか。

ハイグッド代理人： 裁判長、私はその答がこの質問にまさに応答していると思います。記憶する質問は、あなたが家へジャケットを取るために行ったのは会社のためでなくあなた自身のためであったというものです。彼の答

は、私がジャケットを必要としたのは、会社で働き続けるためだったというものでした。

裁判長： 速記官、質問を読み返していただけますか。(速記官が応じ、通訳者が証人に質問した。)

証人： 誰も私にジャケットを取りに行くように言わなかった。しかし、ジャケットなしでは私は仕事を続けることができなかったので、私が乗り物を運転してジャケットを取りに行った。

マクレラン代理人： 私が質問を1、2、この点について、行ってよろしいでしょうか？

裁判長： はい。

マクレラン代理人：

Q： トミシロさん、誰かがあなたに、私がこの質問をしたらこのように証言するように言いましたか？

A： いいえ。

Q： さて、トミシロさん、運転免許について、あなたの運転免許はいつ失効しましたか？

A： 私は、日付は分かりませんが、しかしその年の1年前でした。

Q： あなたの運転免許番号1703は1958年2月12日に失効したのではないですか？

A： 運転免許の番号は正しいですが、いつ失効したか、正確な日付は分かりません。

Q： その日付を失効日として、この事件の捜査官に報告しませんでしたか？

A： 思い出せません。

Q： タカシ・トクダさん(発音による)と1959年12月11日に面会しましたか？

A： 日付は分かりませんが、面会はしました。

Q： その時に有効な運転免許を持っているか、尋ねられましたか？

A： 彼はそのことを尋ねたと思います。

マクレラン代理人： あなたはその質問に答えて、何を彼に話したか覚えてい

ますか？

ハイグッド代理人： 少しお待ち下さい。裁判長、ベンチ・カンファレンスを行ってよろしいですか？

(短時間のベンチ・カンファレンスが開かれた。)

マクレラン代理人： 最後の質問を撤回します。

マクレラン代理人：

Q： さて、トミシロさん、あなたがあなたのジャケットを取りに行くために車両基地を去ったとき、トラックを署名して持ち出すか、あなたの目的地に関して何らかの表記をし、または外出について、何らかの記録をしましたか？

A： 通例、私は私たちの事務所の黒板に目的地を記します。しかし、その夜は遅く、誰も事務所にいなかったので、黒板に目的地を記ませんでした。

Q： 車両基地の門のところにいる守衛に、署名して持ち出しませんでしたか？

A： 覚えていません。

Q： あなたは行き先を誰かに伝えませんでしたか？

A： 私が那覇の仕事場へ行ったときに、私たちがトレーラーを運転したときに、那覇の仕事場へ行くと誰かに言いました。

Q： もう一度質問させて下さい。モロミのあなたの家へジャケットを取りに行くピックアップトラックで去ったときに、どこに行くか誰かに告げましたか？

A： いいえ。

Q： あなたはその夜にいつか、家に行き、あなた自身のためにジャケットを取るつもりだと伝えましたか？

A： 私は誰にもそのことについて伝えませんでした。しかし、その夜はとても寒かったので、事務所にいた人はみな震えていました。

Q： その夜にあなたが去ったときに事務所には誰もいなかったのですよね？

A： 私は那覇の私たちの仕事場のことを言ったのです。

Q： その夜に仕事を続けるために家にジャケットを取りに行った他の従業員がいたのか知っていますか？

A : 分かりません。

Q : かつて会社の乗り物で、自分自身が仕事を続けるためジャケットを取るために、同様の外出をしたことがありますか？

A : いいえ。

マクレラン代理人 :

Q : さて、トミシロさん、あなたはそのピックアップを公道で免許なしで運転することが違法であると知っていましたよね？

A : はい。

Q : 誰が、29日午前8時から、一日中そして一晩中、あなたに働くよう割り当てたのですか？

A : 誰も私に言いませんでした。しかし、私たちは建設を急いで完成させなければならず、労働者を必要としていました。それゆえ、会社はとても忙しく、私が決めたのです。

Q : あなたが一日中そして一晩中、働くことを決めた、ということで正しいですか？

A : はい。たいてい私はそうします。

Q : あなたがモロミのあなたの家へ行くために車両基地を去ったとき、行くことを決めたときに、あなたはどのような種類の仕事を実際にしていましたか？

A : 私はクレーンを修理していたと思います。

Q : 家へ行こうと決めたのはいつでしたか？ あなたが去った直前ですか、またはあなたが行く時とあなたが実際に行ったときの間に時間の経過がありましたか？

A : その夜は寒くて、いくらか時間が経過した後に、家へ行くことを決めました。

Q : あなたがジャケットを必要とすると決めたとき、あなたが実際に家へ行く前にどのくらいの時間がありましたか？

A : 2時間ほどです。

Q : あなたが決めたときに車両基地に他の人はいましたか？

A： いいえ。

Q： このことはあなた的那覇航空基地への最後の外出をした前でしたか後でしたか？

A： どういう意味ですか？

Q： あなたはヒガさんを路上で見て、車両基地へ戻り、トラックとトレーラーをピックアップして那覇航空基地へ戻ったと言いました。それで、あなたが家へ行きジャケットを取ると決めたのは、あなたが那覇航空基地へ最後の外出をした前でしたか？

A： その後でした。

マクレラン代理人：

Q： トミシロさん、あなたはジョージ・ホールさんに会社の乗り物を公道で運転することをあなたの無免許のために禁じられていたことと、あなたの仕事は公道で乗り物を運転することを必要としなかったことに、間違いありませんか？

A： いいえ、私は運転することを禁じられていませんでした。

Q： あなたが運転する必要がないよう、会社によりいつも運転手が割り当てられて、運転手が仕事場への送り迎えをできるようにしていたことに、間違いありませんか？

A： はい。車両基地に運転手がいましたから、仕事場へ私と一緒に行くよう頼みました。

Q： そして、1959年11月29日夜と30日早朝、またはむしろ30日早朝に、あなたがF E C O Nで働いたすべての機会、すべての時間に、沖縄の公道で会社の乗り物を運転した唯一のときだったということで、間違いありませんか？

ヘイグッド代理人： その質問に異議を申し立てます。その質問は理屈っぽいです。そのことに時間をかけ過ぎです。

裁判長： その質問は理屈っぽくはありませんが、繰り返しが多いです。

マクレラン代理人： 質問を撤回します。質問は以上です。

裁判長： 再主尋問はありますか、ヘイグッドさん。

ヘイグッド代理人： 再主尋問はありません。

裁判長： ヒガさん、2、3の短い質問があります。

補充尋問

裁判長による質問：

Q： あなたが雇用されたとき、あなたの運転能力、あなたが運転できることについて、何か議論はありましたか？

A： いいえ、ありません。

裁判長： よく分かりました。代理人から何もないければ、証人はお帰りいただいて結構です。

(証人は退廷した。)

マクレラン代理人： 裁判長、時間に関してですが、休廷してはかがかでしょうか？ 私にはある用事があり、この昼休みに処理しなければなりません。

裁判長： 分かりました、1時30分まで休廷しましょう。そのときにさらに申請している証人がいるのでしょうか？

ヘイグッド代理人： はい。

裁判長： 1時30分まで休廷します。

(法廷は1964年7月8日午前11時34分に休憩に入った。)

続く (以下、獨協法学109号掲載予定)